

学生の基礎看護学実習要項に対する理解度への質的検証

— 新設学部初の臨地実習に向けて —

呉大学看護学部

高 田 泉 松 原 みゆき
中 島 優 子 引 野 裕 子

論文要旨 新設の看護学部において1回生が、初の臨地実習に対して持つ不安や疑問は、多大なものであると考えられる。そこで筆者らは、基礎看護学実習要項の内容または基礎看護学実習全体に対しての疑問・質問・不安等を質問紙をもちいて事前調査し、それらについて講義のなかで、学生全体に答える場を設けた。

調査の結果、学生の理解度の問題、教員間で分析・検討していくべき問題、広く教育環境に関する問題等が明確になった。さらに、一学生の疑問であっても質的に重要であると思われる内容については全体の問題として取り上げ、個を重視する教育とは何かについて、再考する機会を得た。

キーワード：基礎看護学実習、事前調査、個を重視する教育

■ はじめに

呉大学看護学部は平成11年4月に開学した。そして平成12年10月に1回生93名が、本学初の臨地実習である1週間の基礎看護学実習Ⅰに出る。先輩学生のいない新設学部において、在学生が基礎看護学実習を前に、抱える不安や疑問は多大なものであると考えられる。したがってこの時期に、まず教員が学生の現状把握をし、答えられる疑問等については明確に答えておくことは、臨地実習を有意義なものとするための第1歩となりうると筆者らは考える。

そこで、臨地実習を目前にした1回生に基礎看護学実習要項を配布、説明を行った後、実習要項の内容、さらには基礎看護学実習Ⅰ全体に対しての疑問・質問・不安等を質問紙に記述させた。その内容から学生の現状を把握した結果、臨地実習指導のあり方に若干の示唆を得たので報告する。

■ 研究方法

1. 調査期間 2000年7月
2. 調査対象および調査方法

対象は呉大学看護学部1回生93名。調査方法は記名式の質問紙(表1)を用い、看護技術学Ⅰの講義中に配布し、終了後に回収する(回収率100%)。また基礎看護学実習要項(添付資料)や、実習全体に関する疑問・質問や現在の心境等を、自由記述させる。

表1 基礎看護学実習Ⅰアンケート

学生証番号	基礎看護学実習Ⅰ・グループ	氏名
1 基礎看護学実習要項の下記のページを読んで、疑問・質問・不安に感じる事・感想・その他、自由に書いて下さい。		
① p1～2を読んで		
② p3～4を読んで		
③ p7を読んで		
④ p8を読んで		
⑤ p23～26を読んで		
⑥ p31を読んで		
⑦ p32～34を読んで		
2 基礎看護学実習Ⅰに関して、基礎看護学実習要項以外で疑問・質問・不安な点・その他、自由に書いて下さい。		

3. 分析方法

- (1) 全学生に対し、現時点で教員が返答し説明を加える必要性のあるものと、それ以外の臨地実習を控えた学生の心境等が記述されているものの2つに分類する。

- (2) 基礎看護学実習オリエンテーション時、その内容について教員が全学生に対して返答・説明した。
さらに意味内容を、カテゴリーに分類し検討する。

■ 結果及び考察

1. 教員が返答し説明を加える必要性のあるもの

1) 基礎看護学実習要項に対してのアンケート結果

	学生が記述した主な内容	教員のコメント
① カンファレンスに関して (10件)	・カンファレンスとは何か。	・カンファレンスとは、討議・相談することである。課題をメンバーが共有し、全員の学びとして発展させることが主な目的である。(カンファレンスの目的、方法、留意点等プリントで確認した)
	・毎日、実習の終わりに行われるカンファレンスでは具体的にどのようなことを誰が話すのか。	・カンファレンスの内容は、その日の実習の中から課題を見つけて話し合い討議する。司会、書記等の役割を全員で経験する。
	・カンファレンスでは学生も何か話すのか。	・学生全員が発言することを原則とする。
② 患者インタビューに関して (5件)	・インタビューの内容は患者の日常生活等に限定しないで、自由に考えてもいいのか。	・患者の状態を観察しながら、入院前後の日常生活や家族のこと等を聞く。その他、趣味や生活信条などを聞けるかも知れない。
	・患者にインタビューとは、何をするのか。	・インタビューとは患者と言語的コミュニケーションをとることだと考えればよい。
	・患者にどういうことまで聞いて良いのかわからない。	・患者が話したがらないことは、無理に聞き出すべきではない。そのようなことをすれば患者との信頼関係が崩れてしまうだろう。

での原点とも一致する言葉だったということを再認識した。

また②のインタビューの細部に関する疑問・質問等は、見藤が、現代学生の特性と傾向の一つとして、兄弟が少ない、受験勉強ばかりで友人と遊ぶ機会がなかったなど、人間関係を実地に学んでいないために、人間関係が上手にとれず苦手²⁾と

①では、カンファレンスの意味や内容がわからないといった記述が10件もあった。筆者らにとって、この用語は日常的に共通認識できるものであり、千名はナースに「ガスはまだ出ませんか」と聞かれ、おろおろしながら、室内の暖房機の自動点火のことを聞かれたのかと考えたという患者の例を挙げ、患者が日常使っている言葉を日常使っている意味に使えば、患者に戸惑いを与えずにすむ¹⁾と解説している。「常に対象者の側に立って考える」という看護職としての原点は、教員とし

ていることから考え合わせれば、出るべくして出たものであるといえよう。看護の対象は人間であり、患者との信頼関係が看護の出発点であることを考えれば、教員はこの種の学生の問いかけに、一つ一つ丁寧に対応していくことが今後必要となるであろう。

2) 基礎看護学実習 I 要領に対してのアンケート結果

	学生が記述した主な内容	教員のコメント
① 入院患者の全体的理解について	・患者とは、いつ対面するのか。	・臨床指導者に紹介されてから対面する。
	・担当の患者がいるのか。	・コミュニケーションのとりやすい患者を臨床指導者に決めてもらう。
	・あらかじめ情報収集しておいてから、患者に質問するのか。	・看護記録等であらかじめ情報収集しておいてから、患者のところに行くといい。

(8件)	・情報収集するのにメモ帳をもって行っていいか。	・その場で必要な事をメモする為に、小さなメモ帳を用意する。 ・患者の秘密保持のため、紛失しないようにくれぐれも注意すること。
② 実習グループメンバーとの関係性について (3件)	・実習先では同じグループの学生が何名かで固まって行動するのか。	・基礎看護学実習Ⅰでは、全員で臨床指導者から説明を受けたりする場面が多いと思う。しかし、1人1人が個別の計画にもとづいて行動することの方が多い。
③ バイタルサイン測定について (1件)	・バイタルサイン測定の際、準備から後始末まで教員等は指導・指示するのか。	・教員、臨床指導者等が立ち会いが、自分で責任をもって実施することが大事である。また測定値は患者にとって大事な情報なので、必ず報告し、自分のメモ帳に記録する。

上記①②合わせて11件は、1) ②と同様に自分以外の他者との関係性に対する疑問・質問であるといえる。

また③は一件のみではあるが、服部が「能動性より受動性が強い」³⁾とする現代日本の青年の特

性そのものであると考えられる。教員は、学生が看護に自信と責任を持つことができるように、看護技術の手順を教えると同時に、その技術の科学的根拠を明らかにしていかなければならない。

3) 評価表に対してのアンケート結果

	学生が記述した内容	教員のコメント
① 自己評価の基準に関して (1件)	・自己評価の際、3段階の基準がわからない。自分自身の出来ばえを思うように評価すればいいのか。	・それで良い。良くできた＝3、まあまあできた＝2、できなかった＝1というように、評価する。
② 自己評価と成績の関連性について (1件)	・自己評価は、そのまま成績にひびいてくるのか。	・教員は、学生の自己評価をそのまま成績にすることはしない。
③ 患者理解に関して (1件)	・短期間でどこまで患者の心理・社会的役割を理解できるか。	・学生のできる範囲での理解に努める。

上記①②では、自己評価するということに対する学生のとまどいが素直に表出されている。看護が必要とする客観性の訓練の第一歩が、この自己評価表でされているということを、実習後の自己評価と教員評価が必ずしも一致しないことから、これらの学生は把握していくであろう。また③の「短期間でどの程度、患者理解ができるか」という疑問が実習前に出てくるといことは、それだ

け真剣に実習に取り組もうとしている証しであると考え。患者理解の評価は目標に照合して行うという事を、再度教員間で明確にしておかなければならない。そして学生にとって基礎看護学実習で学んだ患者理解の過程が、次の実習を進めていく為の大きなステップになるということを、筆者らはここで再確認した。

4) 技術経験表に対してのアンケート結果

	学生が記述した主な内容	教員のコメント
① 「一人で実施」の解釈に関して (2件)	<ul style="list-style-type: none"> ・「一人で実施」というのは、ナースの指示があってするのか。 ・ベッドメイキングや臥床患者のリネン交換は学生だけで実施してみたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・患者の状態や、実習施設の事情等もあるので、臨床指導者や教員が立ち会いのもとで実施する。自己判断だけで勝手にはしない。
② 経験表のあり方に関して (5件)	<ul style="list-style-type: none"> ・経験しない技術もあるのか。 ・経験項目以外のことを実施した場合、それを書く欄があっても良い。 ・経験できない技術があっても本当に成績に反映されないのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・患者が中心であり、患者のニーズの充足の為に日常生活援助をすることを、いつも念頭に置く。 ・経験できない技術項目もあり得る。機会をとりえて日常生活援助を積極的に、見学または実施する。

学生の記述から「技術経験表に書かれている通りのことを全部できるのだろうか。」という実習前の心境と、あせりが伝わってくる。この技術経験表は、限られた実習時間数の中で、学生が卒業時になって、「基本的な生活援助技術を経験する機会がなかった」といった事態が起きるのを回避

する為に、実習開始までの既習項目について筆者らが作成した。したがって基礎看護学実習だけで経験するものではなく、卒業までの期間に経験させたい項目であるということを、臨床指導者、教員が共に理解して学生に指導する必要があると考える。

5) グループ分け及び実習施設に対してのアンケート結果

	学生が記述した主な内容	教員のコメント
① 実習施設に関して (9件)	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎看護学実習ⅠとⅡで実習施設が変わってしまうグループがあるが、他のグループと差が出ないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本来なら基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱは同じ実習施設で実習したいが、呉大学以外の学校も多数、実習している都合等あり、実現できなかった。新設学部であることの困難はいろいろあるが、今後、最大限実習環境を整えるように、教員は努力していく。
	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の施設の場所がわからない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・病院のパンフレット等を各施設ごとにファイルしてあるので、自由に閲覧できる。
② 実習グループメンバーと担当教員に関して (7件)	<ul style="list-style-type: none"> ・グループと担当教員は卒業までずっといっしょなのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ編成は変わることもある。同じ教員が担当することはできない。
③ 交通費に関して (1件)	<ul style="list-style-type: none"> ・交通費は自己負担するのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己負担である。

上記は附属の病院を持たない新設看護学部の課題が、そのまま学生の不安につながった結果といえよう。学生が指摘するマイナス面を逆手に取り、どんな環境にも適応していけるたくましい看護職

を育てていく決意を教員は固めたい。しかしその一方で問題が生じた場合には、柔軟で迅速な対処と学生の心理的ケアを積極的に行うことが必要であると考ええる。

6) 実習上の注意に対してアンケート結果

	学生が記述した主な内容	教員のコメント
① 身だしなみ に関して (4件)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 派手でない透明なピアスもだめなのか。 ・ どのくらいの身なりなら良いのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ピアスは付けないことに決める。派手の基準の線引きはできないため。
② 欠席に関し て (1件)	<ul style="list-style-type: none"> ・ やむを得ず欠席した場合はどうなるのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実習は全出席を原則とすることを強調しておくが、やむを得ず欠席した場合の対応については、学則に定めた単位認定基準に従うことになる。また患者も学生が実習に来るのを待ってくださっているかもしれない。欠席はそんな関係を壊す一因になりうる。

身だしみの問題について、佐藤らは入院患者に対して看護婦の身だしなみに関する意識調査を実施している。その結果、患者が最初に目につくものは、服装55%、化粧26%、アクセサリ4%であったとし、中でも指輪・ピアスはその半数以上が派手でなければ良いと答えたとしている。また

看護婦のおしゃれは、身だしなみ程度は必要と患者の71%が答えている⁴⁾。この結果からみても看護職者となつてからのおしゃれは、常識の範囲内で必要であるといえよう。しかしこれから看護を学ぶ看護学生に求められる身だしなみには、一定の基準が必要であると考ええる。

7) 「実習中の事故について」「感染事故防止と対応」「状況報告書」に対してのアンケート結果

	学生が記述した主な内容	教員のコメント
① 医療事故に 関して (4件)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 患者にけがを負わせるようなことをしたらどうなるのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事故やミスはあってはならないと肝に銘じることが大事である。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実習中に事故にあった場合、保険はおきるのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 看護実習に対する保険に大学で加入している。

看護学生が起こす事故としては、学生の不正確な血圧測定値の為に、診療が不十分になった事故、学生が患者をみていた時の患者のベッド転落事故、絶食中の患者に学生が配膳してしまった事故、学生の患者抑制不十分のための転落事故、学生が幼児患者とベッドで話をしている時、突然幼児がベッ

ド柵を乗り越え転落してしまった事故等⁵⁾が報告されている。

医療事故が社会問題化している現状において、折りにふれ、学生のうちから医療事故に対する教育を続けていく必要性があると考ええる。

8) 実習要項以外の基礎看護学実習Ⅰに対してのアンケート結果

	学生が記述した主な内容	教員のコメント
① その他 (27件)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昼食はみんなと同じ時間に取れるのか。 ・ 実習中に休憩時間はあるか。 ・ トイレに行くには断るのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昼食時間等は実習施設ごとに違う。教員から指示がある。

実習の細部にわたって、27件もの質問が出された。しかしその内容の多くは、青年期の真っ只中にいる学生ならば、他者に確認しなくても充分自己判断できると思われるものである。教員はこの

現状を知り、臨地実習に出ることが、学生自身の行動の自立につながるよう教育していかなければならない。

2. 臨地実習を控えた学生の心境等の自由記述

① ネガティブ イメージ	A. 実習に対して否定的な心境	(2件)
	B. 「不安」という言葉が記述中に含まれるもの	(34件)
	C. A. B. 以外で実習に対してのネガティブイメージが記述されたもの	(47件)
② ポジティブ イメージ	D. 実習前に予習したい内容が具体的に記述されたもの	(38件)
	E. 実習中の個人目標が記述されたもの	(63件)
	F. 「がんばる」という言葉が記述中に含まれるもの	(11件)
	G. F 以外で実習に対してのポジティブイメージが記述されたもの	(10件)
③ その他	H. A～Gに該当しない記述	(47件)

(252件・複数回答あり)

筆者らは、学生の自由記述した内容をA～Hに分類した。A～Cをネガティブイメージ、D～Gをポジティブイメージ、Hをその他として分類した。

上記Aの「実習の内容は難しそうで自分にはできそうにはない」「毎日こんなにできそうにない」といった実習への否定的な心境が記述された2件に対して、教員は個別に面接し、その学生の心境を把握した上で、実習中・後も密接に関わった。

また上記Bの34件もの「不安」の記述は、学生にとって臨地実習が大きなストレスとなっていることを提示していると考えた。看護学生の臨床実習前の不安について、岡部らは個々の学生の特性、不安の個人差に焦点をあてて調査した結果から、教員は指導にあたりカリキュラム上の内容のみでなく、個々の学生の健康状態、学生生活、看護職への意欲、自分の成績をどう考えているかなどを十分考慮していく必要があると結論づけている⁶⁾。学生の個別性を重視していくためにも、今回筆者らが記名式で実施したアンケートを、今後の実習指導に生かしていかなければならないと考える。

そして上記D Eを合わせた101件には、不安な心境のままでいるだけではなく、それを乗り越える為、実習前に「看護技術や基礎看護学の講義内容を総復習」し、実習中は「自己の健康管理に気をつけていく」といったような記述が目立った。筆者らは学生の声に答えるべく、実習までの時間を看護技術の復習等にあてていくこととした。

今回の学生に対する質問紙法による調査とその後の経過から、筆者らは初めての臨地実習を目前にした学生の疑問、心境を知った。そして学生の

疑問に対しては答えることができた。それと同時に、基礎看護学実習に向けての教員間の問題、教育環境に関する問題についても認識することができた。

上田が「たとえ教師は十分わからせたと思って、学ぶ側も十分わかったと思って、両者が同じわかりかたをすることはしない。人間が人間を教えることにははっきり限界がある。その限界の自覚があってはじめて、すなわち教師は決して学ぶ者を自分の思うままに導くことはできず、望ましい影響を与えることのみが可能かつ正当だと認識できてはじめて、教育は成立する。」⁷⁾とする教育の前提条件を、今後も筆者ら自身に言い聞かせながら、学生と共に学んでいきたい。

また今回1件の疑問に対しても、それを学生全体の問題として取り上げていったが、上田が「わからなさを大切にすることとは、それぞれの個性的なわかりかたを重んずるということである。わかりかたの違いを大事にするという謙虚な心ばえは、相手の存在を尊重する和の精神に通じよう。」⁸⁾とする個を重視する教育と一致する。学生93名の傾向をつかみ、分析・考察することのみにとどまらず、そこから一步踏み込み1人1人の想いに答えられる実践を積み重ねていきたい。

■ おわりに

今後も、基礎看護学実習終了後の学生の成長を期待すると共に、その成長過程に浮上するであろう新たな問題解決のために、今回の調査結果を生かしていきたいと考える。

引用・参考文献

- 1) 千名裕：ナースのための患者接遇，学研，1998.
- 2) 見藤隆子：人を育てる看護教育，医学書院，1987.
- 3) 服部祥子：青年期の心理と発達危機，看護教育，40(1)，p.17，医学書院，1999.
- 4) 佐藤理香他：看護婦の身だしなみに関する意識調査，秋田県農村医学会雑誌，1(1)，1997.
- 5) 木下健治：学生の看護事故の法的責任について，看護教育，32(11)，p.683，医学書院，1991.
- 6) 岡部聡子他：看護学生の臨床実習前の不安について，看護教育，32(11)，pp.668-637.
- 7) 上田薫：人が人に教えるとは，p.14，医学書院，1995.
- 8) 前掲書，p.45.
- 9) 延近久子編著：臨床実習指導のプロモーション，ユリシス出版部，1992.
- 10) ヴィクトリア・スクールクラフト・豊澤英子他訳：看護を教える人への14章，医学書院，1998.

<p><添付資料></p> <p style="text-align: center;">基 礎 看 護 学 実 習</p>	<p>2 年次・後期 3 単位・必修</p>
---	----------------------------

基礎看護学実習は初期体験学習の意義を有しており、医療の場である病院で医療を受ける患者に接して、患者及び家族の健康への取り組みの実際を知る機会とする。さらに患者の理解に重点をおき、看護過程展開の基礎を学ぶ。併せて看護婦・士や他の保健医療従事者に接して医療活動を見学または参加体験することにより、看護学学習への強い動機づけと社会的使命感を持つことを目指す。

基礎看護学実習Ⅰ・要項

Ⅰ. 目的

学内で学んだ知識をもとに、患者と接する機会をもって患者の療養生活について認識を深めるとともに、看護婦・士や他の保健医療従事者の活動を見学、または参加体験して看護の役割・機能を理解する。

Ⅱ. 目標

1. 病院で療養生活を送る患者の環境を理解する。
2. 患者と接して、療養生活に対する思いを理解する。
3. 保健医療チームにおける看護婦・士の役割を理解する。
4. 患者の状況を把握し、既習の日常生活援助ができる。

Ⅲ. 実習内容

1. 病院の環境・構造について理解する。
2. 病棟・病室・病床の環境・構造について理解する。
3. 入院患者の生活の場としての病床を知る。
4. 入院患者の一日の過ごし方を知る。
5. 入院患者の入院生活に関連する患者の思いを知る。
6. 病院の役割・機能について理解する。
7. 保健医療に従事する職種について理解する。
8. 既習した看護技術を使って日常生活援助を実施する。

Ⅳ. 実習方法

1. 実習内容 1・2・6・7 については、見学及び説明を受ける。
2. 実習内容 3・4・5 については、看護場面に参加したり、臨床指導者から紹介される患者にインタビューを行なう。
3. 実習内容 8 については、臨床指導者から紹介される患者に看護婦・士、教員、臨床指導者のもとで実施する。

Ⅴ. インタビューまたは生活援助を実施する患者の選定基準

1. 言語的コミュニケーションが可能で看護婦・士による日常生活援助を必要としている患者。
2. 病状が安定している患者。

Ⅵ. カンファレンス

1. 毎日原則として14時30分～15時にカンファレンス又は個別指導を行い、教員は助言をする。
2. 施設実習の最終日には実習施設でまとめカンファレンスを行い、教員と臨床指導者は助言をする。

3. 基礎看護学実習Ⅰの最終日には、大学で実習まとめカンファレンスを行う。
4. カンファレンスの内容は、その日の実習をふまえたテーマにする。

VII. 実習記録

<毎日提出する記録物>

1. 出欠表 (p.5)……学生は毎日教員に提出し、教員はサインをする。
2. 行動計画表 (p.6)……一日の行動計画は学生が記入し教員の指導を受けた後、臨床指導者の助言を受ける。「実習目標・実施に対する評価」の欄には一日の実習をまとめて整理し、翌朝教員に提出する。

<実習終了後に提出する記録物>

1. 実習レポート
テーマ1「病院・病棟、病室・病床は利用する人達（患者、職員）にとって、どのような工夫や配慮がなされていたか説明し、意見または考えるところを述べよ」
テーマ2「患者はどのような生活を送っているか、1日のスケジュールを患者の反応も考慮して説明し、意見または考えるところを述べよ」
テーマ3「患者の日常生活援助をしてみて考えるところを述べよ」
* テーマ1～3全てに対し、A4用紙各1枚ずつ記入する。
2. 基礎看護学実習Ⅰ評価表 (p.7) …自己評価の欄の該当する箇所に○を記入し提出する。
3. 基礎看護学実習Ⅰ技術経験表 (p.8)
* 1. 2. 3. は、出欠表、行動計画表とともにファイルに綴じて、平成12年10月20日（金）正午までに教員に提出する。

VIII. 評価

臨床指導者の助言をうけて、出席、実習態度、実習記録（p.8 基礎看護学実習Ⅰ技術経験表を除く）、面接、カンファレンス等を通して総合的に教員と単位認定者が合議の上で行う。

基礎看護学実習Ⅰ・要領

I. 実習場所、グループメンバー、指導教員…別紙 (p.23～26)

II. 実習期間と日程

<期 間>平成12年10月10日(火)～10月16日(月)

<実習時間> 9 時～15時

<日 程>

	実習内容	実習方法
10 ・ 10 火	<p><大学></p> <p>AM</p> <p>実習オリエンテーション</p> <p>実習目的・目標、実習場所、実習期間、交通機関、集合場所、実習グループメンバー、臨床指導者名・教員の確認、実習グループリーダーの選出、出欠席の連絡方法、更衣室の使用方法、鍵の取り扱い方法、実習上の注意・実習中の事故について、感染事故防止と対応の確認(p31～34)、実習記録の種類と記入方法</p> <p>PM</p> <p>各グループでカンファレンス 看護技術の復習</p>	<p>実習要項・実習要領にもとづいて事前学習をしておく 教員から説明を受ける</p> <p>グループカンファレンスをする 既習した看護技術を学内で復習する</p>
10 ・ 11 水	<p><実習施設所定の場所に直接集合></p> <p>AM</p> <p>実習施設のオリエンテーション</p> <p>病院の概要、特徴、組織、看護部の看護方針 看護体制、記録物の種類・記入方法 物品の配置、病院・病棟の構造 入院患者の概要、医療に従事する職種とその連携 ナースステーションの構造 病棟の週間予定・病棟の1日の流れ</p> <p>PM</p> <p>入院患者の全体的理解</p> <p>1. 生活の場としての病床 患者の置かれている環境の把握</p> <p>①病室内の構造 ②ベッドの構造 ③一般住宅との違い ④病棟の温度、湿度、音、光、臭い ⑤プライバシー保持への配慮</p>	<p>臨床指導者から説明を受ける 病院・病棟内の施設・設備の見学をする</p> <p>臨床指導者から紹介される患者の健康障害に伴う日常生活の変化（環境・運動・睡眠・衣生活・栄養と食事・排泄・移動等）について説明を受ける 入院前の生活については看護記録から情報収集または、患者にインタビューをする</p>

10 ・ 11 水	2. 患者の一日の過ごし方 ①生活習慣 ②入院による生活リズムの変化 3. 入院生活に関連する患者の思い ①健康障害による身体的変化 ②健康障害による心理的变化 ③入院に伴う社会的役割変化	
10 ・ 12 木	日常生活援助の実施 診療に伴う技術の実施（測定のみ）	既習の看護技術を使って可能であれば実施する（p8基礎看護学実習Ⅰ経験表を参照） 看護婦・士、臨床指導者、教員のもとで準備、実施、後始末を行う 看護の際には患者の反応を見ながら声かけをする
10 ・ 13 金	AM 10月12日と同様 PM まとめカンファレンス	
10 ・ 16 月	<大学> 実習まとめカンファレンス テーマ「基礎看護学実習Ⅰで学んだこと」 （例）*実習中の体験で他のグループに伝えたいこと *実習で印象に残ったこと *基礎看護学実習Ⅰの目的・目標を振り返って	AM グループカンファレンスを行う PM 全体カンファレンスでグループごとに発表する

基礎看護学実習Ⅰ 評価表

学生番号 () 氏 名 () 実習施設 ()
病棟名 ()

評 価 項 目		評価用具	自己評価			評価		
			3	2	1	3	2	1
環境理解	①病院・病棟の環境・構造について述べるができる	実習記録 面接						
	②病室・病床の環境・構造について述べるができる							
患者理解	①患者の一日の過ごし方について述べるができる	実習記録 面接						
	②健康障害による身体的変化について述べるができる							
	③健康障害による心理的变化について述べるができる							
	④入院に伴う社会的役割変化について述べるができる							
看護婦・士 の役割	①病院の役割・機能について述べるができる	カンファレンス 面接 実習記録						
	②保健医療チームの中での看護婦の役割について述べる ことができる							
日常生活 援助	①既習の看護技術を使って、一つでも看護婦とともに患者 の反応を見ながら日常生活援助を実施することができる	実習場面 面接						
	②原理・原則をふまえて実施できる							
実習 態度	①患者・家族・医療従事者に対して相手を尊重した言葉 遣いができる	実習場面 カンファレンス 面接						
	② 他者の意見を聞き入れ、自己の考えを述べるがで きる							
実習 レポ ート	①テーマと内容が対応している	実習レポート						
	②実習で体験した具体的な事実をふまえて自分の看護につ いての考えを表現できる							
	③実習を振り返り、気づきや自分の課題を表現できる							
講 評		合 計						
		＊該当する箇所に○を記入する ＊合計には○を足した数を記入する						
教員名								

基礎看護学実習Ⅰ 技術経験表

学生番号 () 氏 名 () 実習施設 ()
病棟名 ()

Ⅰ 日常生活援助		見学	看護婦とともに	一人で実施
環 境	1. 病室の清潔・整頓			
	2. 室温、換気、採光の調整			
	3. ベッドメイキング			
	4. 臥床患者のシーツ交換			
	5. オープンベッド作成			
	6. ガジベッドの操作			
姿 勢 ・ 動 作	1. 半坐位にする方法			
	2. 仰臥位から坐位にする方法			
	3. 側臥位にする方法			
	4. 立位にする方法			
	5. 良肢位のとらせ方			
	6. 安楽な姿勢の保持（安楽枕の使用等）			
	7. 特殊体位（シムス位）の介助			
移 動	1. 車椅子からベッド			
	2. ベッドから車椅子			
	3. 車椅子による移送			
	4. ストレッチャーからベッド			
	5. ベッドからストレッチャー			
	6. ストレッチャーによる移送			
そ の 他	1. ナースコール・インターホンの取り扱い			

Ⅰ 診療に伴う技術		見学	看護婦とともに	一人で実施
測 定	呼 吸	1. 数・深さ・リズム		
	循 環	1. 脈拍測定（数・リズム・緊張）		
		2. 血圧測定		
	体 温	1. 体温測定		

1. 経験時は該当項目に○を記入する。
2. この経験表は基礎看護学実習で経験する可能性の大きい看護技術項目を列記したもので、すべてを網羅することが目的ではない。したがって評価の対象にはならない。
3. 斜線のある項目は実施できない。

実習科目及び実習施設

実習科目	単位	実習時期	実習施設
基礎看護学 実習Ⅰ	1 単位	2 年後期 平成 12 年 10 月 10 日 ～ 10 月 16 日	・ A 病院 ・ B 病院 ・ C 病院 ・ D 病院 ・ E 病院 ・ F 病院
基礎看護学 実習Ⅱ	2 単位	2 年後期 平成 13 年 2 月 19 日 ～ 3 月 2 日	・ A 病院 ・ B 病院 ・ C 病院 ・ D 病院 ・ F 病院 ・ G 病院

基礎看護学実習Ⅰグループ分け及び実習施設

グループと グループメンバー	実習施設 (基礎看護学実習Ⅰ)	教員	臨床指導者
1 グループ 学生 8 名	B 病院	教員① 教員②	
2 グループ 学生 8 名	B 病院	教員③ 教員④	

グループと グループメンバー	実習施設 (基礎看護学実習Ⅰ)	教員	臨床指導者
3 グループ 学生 8 名	C 病院	教員⑤ 教員⑥ 教員⑦	
4 グループ 学生 8 名	F 病院	教員⑧ 教員⑨ 教員⑩	
5 グループ 学生 8 名	F 病院	教員⑧ 教員⑨ 教員⑩	
6 グループ 学生 8 名	A 病院	教員⑪ 教員⑫	

グループと グループメンバー	実習施設 (基礎看護学実習Ⅰ)	教員	臨床 指導者
7グループ 学生9名	D病院	教員⑬ 教員⑭	
8グループ 学生9名	C病院	教員⑤ 教員⑥ 教員⑦	
9グループ 学生9名	D病院	教員⑮ 教員⑯	
10グループ 学生9名	E病院	教員⑰ 教員⑱	

グループと グループメンバー	実習施設 (基礎看護学実習Ⅰ)	教員	臨床 指導者
11 グループ 学生 9 名	E 病院	教員⑱ 教員㉔	

* 実習グループ毎にリーダー，サブリーダーを決める。リーダー，サブリーダーは交代制にする。リーダーはグループの連絡調整役を務める。

実習上の注意

1. 出欠席

- 1) 全出席を原則とし、遅刻、欠席、早退はやむを得ない場合を除いては認めない。
- 2) やむを得ず欠席、遅刻する場合は、実習開始時間までに教員または大学事務局（××××-××-××××）に連絡する。
- 3) やむを得ず早退する場合は、教員及び臨床指導者に申し出る。

2. 健康管理

- 1) 健康管理に十分留意して、体調を整えて実習に臨む。
- 2) 感冒や感染症に罹患し、患者への感染の危険性がある場合は教員に相談する。

3. 服装・身だしなみ・持ち物

- 1) 更衣室でユニフォームに着替え、ナースシューズを着用する。
- 2) 名札をつける。
- 3) 頭髮は肩にかからないようにまとめる。
- 4) 爪は短く切り、マニキュアはしない。
- 5) ネックレス、ピアス、指輪等の装飾品はつけない。
- 6) 実習上施設に不必要なものは持参しない。（携帯電話、ポケットベル等）

4. プライバシーの保持

- 1) 患者の氏名、病名、プライバシーに関することは口外しない。
- 2) 患者氏名を記載するときは、イニシャル又は伏せ字を使用する。住所は市町村区にとどめ、電話番号は記載しない。
- 3) 実習で使用した記録類は紛失に注意し、不要時は責任を持って細かく裂いて処理する。

5. 報告

- 1) 報告と伝達を速やかに行う。
- 2) 看護行為の前後は、必ず看護婦に報告（観察したことや行為の結果も）する。

6. 態度

- 1) 患者、職員に対して適切な言葉づかいと好ましい態度で接し学生の品位を保つ。
- 2) 学生同士でもきちんと姓で呼ぶ。
- 3) 適ときちんと挨拶をする。

7. 実習中の行動

- 1) 実習場所には5分前までに、服装を整え到着する。
- 2) 実習場所を離れる場合は、必ず臨床指導者、教員に連絡する。戻ったときは報告する。

8. 災害時

- 1) 実習中に災害に遭遇した場合には実習施設の責任者の指示に従う。

9. その他

- 1) 実習中患者及び家族から金品を受け取ったりしない。
- 2) 患者・家族からの買い物の依頼等、金銭上の取り扱いはない。
- 3) 学生控え室、更衣室を毎日きれいに掃除する。

実習中の事故について

1. 医療事故について

- 1) 実習中は学習している立場であることを認識して患者の安全・安楽につくす。
- 2) 患者に関わる事故，自分自身に関わる事故が発生した場合は直ちに臨床指導者・実習施設の病棟婦長に報告する。教員にも速やかに報告する。教員は学部学生係に報告する。

2. 物品の破損・紛失について

- 1) 物品は丁寧に取り扱い，無駄にしない。
- 2) 実習施設の物品を持ち帰らないよう注意する。(体温計，絆創膏等)
- 3) 実習施設の物品，患者の私物の破損・紛失に関しては直ちに臨床指導者・実習施設の病棟婦長に報告する。教員にも速やかに報告する。

3. 記録の紛失について

- 1) 患者に関する情報の記載された記録・メモ類については慎重に取り扱う。特に実習の行き帰り時には，そのままではもち歩かず袋等に入れる。
- 2) 患者に関する情報の記載された記録・メモ類の紛失に関しては直ちに臨床指導者・実習施設の病棟婦長に報告する。教員にも速やかに報告する。

4. 状況報告書の記述について

- 1) 教員の指示のあった場合には状況報告書を提出する。

5. その他

- 1) 事故には至らなかったが危険を察知したり，うまくいかなかった事例については，教員が1冊ずつ保管するノートに自由な形式で内容を記述し，以後の実習に役立てる。

* ノートに記述させる内容 (例)

- ・患者をもう少しで転倒させそうになった。
- ・学生がとった言動で患者を怒らせた等。

感染事故防止と対応（血液感染）

1. 感染症に対する免疫状態の把握

- 1) 胸部エックス線写真
- 2) HBs 抗原
- 3) ツベルクリン反応・BCG

2. 実習での血液、体液排泄物及びこれらで汚染された器具類の消毒・取り扱いの徹底

- 1) 観血的な看護技術に関して
 - ① 針刺し事故防止のため、注射針の扱いに注意する。
 - ② 血液、体液、排泄物及びこれらで汚染された器具類を取り扱うときは、手袋を使用する。
 - ③ 手指に創傷や炎症がある場合は手袋を使用する。

3. 学生が感染事故に遭遇した時の対応

- 1) 学生
 - ① 直ちに傷口から血液を絞り出しながら、流水で十分洗う。
 - ② ①と同時に実習施設の病棟婦長に報告する。
 - ③ 教員に報告する

2) 教員

状況把握後、学生部長に報告し今後の対応を相談する。

4. 感染事故に遭遇した学生の事故報告

学生は、後日「状況報告書」を提出する。

状況報告書

平成 年 月 日

実習施設名・病棟名

学生番号

氏名

1. 患者氏名		年齢	歳	病名
2. 種類	事故	破損・紛失		その他（ ）
3. 発生日	平成 年 月 日	時	分	4. 発生場所
5. 報告状況とその原因				
【状 況】				
【原 因】				
6. 患者（家族）への対応と反応				
7. 臨床指導者の助言				
8. 反省				